

hito\*yume  
インタビュー

# やくみつる

巻頭特集

あるときは、社会現象や時の人を痛快に斬る風刺漫画家。  
あるときはタレント、あるときは舌鋒鋭いコメンテーター。  
さまざまなメディアでマルチに活躍する、やくみつるさん。  
博識で飄々とした語り口から迸る、やくみつるモアとウィット。  
底に流れるのは、子どもたちへの深い愛情だった。



【やくみつる】

1959年生まれ。東京都出身。桐蔭学園中・高を経て早稲田大学商学部卒業。大学在学中に、野球ハロディ漫画で漫画家デビュー。『スーパーニュース』（フジテレビ）などテレビ番組のコメンテーターも務める。日本昆虫協会理事。最新著書は『やくみつるの小言・大言2』（新日本出版社刊）。

心にふれるやわらかさを考える。つくる。

# Crecia



うるおいの肌ざわり

Kleenex®  
BRAND

# AQUAVEIL

アクアヴェール

うるおい成分が水分をキープするから  
使い心地しなやかで素肌にやさしい。  
お肌専用のティッシュです。

（さらにひとつ上のクリネックス。）

日本製紙グループ  
日本製紙クレシア株式会社

®Registered Trademark of Kimberly-Clark Worldwide, Inc.

<http://www.crecia.co.jp>

# 先生が持ち込んだ『アサヒグラフ』が、世界への興味と憧れをかき立てた。

小学校1年生のときのやくさん(右端)。虫捕りに夢中な子どもだった。ウルトラマンの怪獣「ガラモン」のマネ。



## 百科事典を片っ端から読みふける

子どもの頃のお話から伺います。やくさんほどのようなお子さんでしたか。

約束の時間より早く、すっと静かに現れたやくさん。そのまま厳かにゆとりとソファに着席する。論客としてテレビで時折お見かけする少々お気の難しいコワモテの厳しい先生か…と思いきや、理路整然とした話しぶりは軽やかで、バラエティーに満ちあふれていた。知られざるやくさんの少年時代から、たっぷりとお話しいただこう。

小学校低学年のときの私のあだ名が、

人形劇「ひよっこりひよたん島」の登場人物にちなんで「博士<sup>ハカセ</sup>」だったことが示すように、大変すぐれた頭の良い子どもでした。

なるほど(笑)。生まれ育ったのは、東京都世田谷区。

桜新町といって、雰囲気は下町です。当時は雑木林や原っぱが至る所にありました。夏はそこで虫捕りに熱中していましたね。今も虫たちはたくさんいるけれど、今の虫は当時の奴らとは顔ぶれが違ってきたと感じます。

また、モノを集めるのも好きでしたね。幼稚園の頃から父が出張先でもらってくる地方自治体の観光パンフレットを集めていました。当時から今に至るまで、コレクションを続けているものも多いです。

ご家庭は教育に関してはいかがでしたか。

特に教育熱心という家庭でもなくて、ごく普通でした。だから私は「よくこの親から、私のような出来のいい子が生まれたものだ」と常々両親に言っております。

ご両親に(笑)。ではハカセの小学校時代の思い出を伺います。低学年の頃はどんなことに興味がありましたか。

本や図鑑が好きでした。1年生のとき父が毎月刊行されるフルカラーの百科事典を買ってくれまして、一冊一冊片っ端からむさぼるように読んでいましたね。

図工の授業中にはこんな思い出もあります。友達と私語をしていたら、先生に指されて、今先生が話した内容を話せと言われました。きちんと即答したところ、「君は聖徳太子のような人ですね」と言われた。ずっとほめ言葉だと思いついていましたが、おしゃべりな私への先生の皮肉だと気づいたのは、ずっと後の大人になってからのことです。

そのまま、優等生のハカセで小学校時代を送られて。

ところが3、4年のとき、荒れてヤンチャになってしまつて。当時の担任の先生がヒステリックなところがあつて、そりが合わなかつたんです。ちよつど自我が強くなる時期でもあ

りました。女子にちよつかい出しては、母が菓子折りを持って相手の家に謝りに行く。それが一度や二度ではなく、何度も続きました。

お母さんからは叱られましたか。

特に何も。その時分の男の子特有のものだと思つたんじゃないでしょうか。今でも親からは「あのとき先生から『学校変われ』とまで怒られたのよ」と言われますね。ただうちの親は少々大げさに話すところがあるので、真偽のほどはわかりませんが。

そのちよつかい出していた女子とは、今ではとても仲良くしていて、一緒に酒を飲む仲です。彼女たちは一生モノの友達になりました。

不思議なものですね。

あと、給食の時間も苦痛でした。その先生は食べ残しがあると、5時間目、6時間目になつても食べさせたんです。私は肉の脂身が苦手です。それでも食べ切れなかつたら給食室まで返しに行くんですが、その屈辱はいかんともしがたく…こっそり渡り廊下に隠していました。

そのイヤな体験から、中学からは絶対給食のない私学に行くこと決意したほどです。まさに「ブチグレ」時代でしたね。

## 先生の家で見せてもらった切手コレクションに興奮

反抗的なブチグレ期は、そのまま高学年まで続いたんですか。

それが5年生からはガラッと、絵に描いたようないい子に変わったんです。

原因は先生。担任が代わり、意識が変わつたんです。担任は鈴木先生といって、父と同年代ぐらゐのガタイの良いおじさんですね。その先生は教室に雑誌『アサヒグラフ』をたくさん持ち込んだ。

そこには、まだ知らなかつた世界がありました。ナイジェリアで当時起きていた『ビアフラ戦争』というのもそこで知つて。当地の子どもの写真は衝撃的でした。人は飢えると、おなか膨らむのだと知つたのもそのときです。



襟元にはプレゼントされた蜂のバッジを着けて。

先生は子どもたちの目を、未知の世界へと向けさせた。

切手の思い出も忘れられません。当時は切手ブームでしたが、先生は自宅に子どもたちを招いて、自分のコレクションを見せてくれたんです。そこには高価な切手もあつて、「大人は違うな」と感心したものです。ポスニア・ヘルツェゴビナ、なんて、当時の小学生は知らないであろう国の名も切手集



めを通じて覚えてたり。

たった一枚の切手から「いつか行ってみたい」と空想し、数十年後に訪問を果たしたことも多いです。

先生に見せてもらった切手が、ずっと心にあったんですね。

先生は一部の児童だけ自宅に呼んで見せてくれたので、**「蟲肩」**と思われるなような仲間同士で秘密にしていましたけれど。

その鈴木先生も7年前にお亡くなりになった。先生の命日には欠かさず、例の女子たちと一緒に墓参りをします。

### 似顔絵が得意で、 ほめられた中学生時代

ルールを徹底的に守ると公言されていますが、小学生時代から曲がったことが嫌いな性格でしたか。

ええ。プチグレした後、一気にいい子になったときから、愚直なまでにルールを守る子でした。例えば信号。通学路の途中に短い横断歩道があるんですが、無視する者はたとえ大人だろうと注意しました。

今でも子どもたちの目の前で信号無視する大人がいると、はつきり注意し

ますよ。無視する大人は決まってエリート然とした奴なんだ(笑)。以前注意したら相手とトラブルになりかけたこともあって、後でかみさんに大変心配されました。

全然興味なかったですね。漫画雑誌を買ったことなかったし。ところが中学のとき、谷岡ヤスジさんの漫画に出会い、その素晴らしさに衝撃を受けました。谷岡先生の作品は、二葉亭四迷を継ぐ言文一致の極致だと感じましたね。

当時やくさんが描いていたものはどんなものですか。

学校資料の表紙などに絵を描いていたけれど、得意だったのは似顔絵ですね。先生や生徒の似顔絵を描いては喜ばれました。先日母校を訪ねたら、当時描いた似顔絵を今も大事に取っておいてくれて、嬉しかったですね。

大学を卒業後は出版社に就職して、二足のわらじで漫画を描きました。「こ

### 理科に強い先生だと、 子どもも嬉しい

ところで先ほどから、ときどき携帯を開いては、データなど確認されていますね。

ああ、私は覚えておきたい興味深い事柄があれば、なんでも携帯にメモを入れるようにしているんですよ。例えば(携帯を操作しながら)これ:「マガーク効果」。

「ガ」と発音する映像に、「バ」という音声を組み合わせて視聴したとしますね。すると「ガ」でも「バ」でもなく、「ダ」と言っているように聞こえるんです。つまり私たちの聴覚は視覚の影響も強く受けていることを示していて、この現象をマガーク効果といいます。放送大学の講座で覚えたことですが、こうして人に話すとその場の話題になるでしょう?」

面白い! そんなネタを常にたくさん蓄えているんですね。幼少期から昆虫好きのやくさんは、日本昆虫学会の理事を務められています。毎年子どもたちの夏休みの自由研究を審査するとか。



携帯電話に入れている豊富な「ネタ帳」から、いくつか楽しい「蘊蓄」を披露してくれた。「このネタはここで使っちゃったから、もうほかでは使えない(笑)」

れで食えるな」と確信できたのは4年目のことでした。

漫画家には、「漫画家年齢」が存在すると私は思っています。実年齢×1.5倍。だから私は還暦はとうに過ぎていて計算になって。

漫画家は実際の年齢より、1.5倍余計に年を取る?

先達を見て、割り出した数字です。手塚治虫先生、石ノ森章太郎先生、谷岡ヤスジ先生といった名漫画家は偉業

今の悩みのタネは、千五百枚にのぼるトイレットペーパーの包み紙たちの行き先。日本にはそういう博物館はないし、かといって海を渡らせるのも忍びないし。

あとは海外旅行ですね。行きたい国を、ABCと、それぞれ十ずつランク分けしてリストアップしています。

今度はコスタリカへ行きます。自然の多いコスタリカはエコツーリズムの本場として知られる地。現地のネイチャーガイドに「こいつ、ただの観光客じゃないな」と思われるように、しっかり下調べしているところです。



※ケリーグリーン

鮮やかで発色のよい緑色。アイルランドで人気があり、国旗にも使われている。アイルランドに「ケリー」という名前が多いことからこう呼ばれている。

# 先生は子どもたちの“引き出し”を、目いっぱい開けてあげてほしい。それは実に愉快なことなんですよ。

「親と旅行したマレーシアの虫の本です」というものより、「地元の虫です」という作品のほうが審査側の好感度は高いかもしれない(笑)。

こうしたイベントやテレビ番組を通じて、子どもたちに虫や自然の面白さを伝えていかなければいけないと常々思っていますね。

最近では虫なんか嫌い、触れないという先生も多いとか。それでは子どもが虫好きになるわけがない。だから私は「先生も理科が好きになれ」と言いたいんです。理科好きな先生だと、子どもたちに面白さも伝わるはず。そうして子どもたちの選択肢を増やしてほしいと望みますね。

## たくさんの方の可能性を示してあげる役割

やくさんの視点、ものの考え方は、小学校時代の影響がかなり強いのはと感じました。今の小学校の先生方へ、メッセージをお願いします。

まさに自分は小学校のあの時代につくられたと思っています。

だから先生方には、子どもたちの引き出しを、開けまくってほしいとお

ですか！」と興味をもってくれて。ただの緑色で済まらず、こうして知ってみると、面白くないですか。

ケリーグリーン…初めて知ると、新鮮で面白いです。

私が子どもの頃集めていたミニカー

の塗装色のひとつだったんです。

子どもたちに教えてあげれば、一気に知識のバリエーションが広がって「色博士」になれますよ。

こうしてあきらまかけを投げかけると、子どもはグイグイ吸収していく。その成長ぶりを見ることは、先生にとって実に愉快なことではありませんか。

願っていたんですね。

どんどん吸収していく時期に、興味の対象を広げてあげてほしい。勉強以外のことで、子どもがまだ知らない世界を示して、子どもたちの選択肢の幅を広げてあげることこそ、塾の先生とは違う、学校の先生の役割だと思っんですよ。

## どんなふうに興味の幅を広げてあげたらいいのでしょうか。

ボランティア経験でも、何でもいいんですよ。趣味をおもちなら、それを掘り下げて提示してあげてもいい。軽自動車

で通勤するなら軽自動車について詳しく、あるいは好きな食べ物があれば、それについてでもいいんです。

例えば、じゃがいもが大好きで、「そもそも、じゃがいもとは…」とじゃがいもに関してはものすごく博識に語る先生がいたとしたら、子どもたちの世界はそこからどんどん広がっていくはずですよ。

## 小学校の友達は一生涯モノなんだよ

では、子どもたちにメッセージはありますか。

何かを調べるとき、パソコンより本にあたって調べてほしいですね。パソコンで検索すると直線的に答えは出る。でも図書館に行くと右往左往しながら無駄な脇道にそれたりすることで、自分に蓄積されていく。

知ってほしいな人に話を聞きに行ってもいい。そうした労苦自体を楽しむように、先生も指導してもらいたいですね。私自身そうしてきたことが、全部血肉となりましたから。

## 小学校の教壇に、先生として立たれたこともあったか。

NHK・Eテレの番組「ようこそ先輩」で母校を訪ねたとき、一週間だけ教育者になりました。

受け持ったクラスは学級崩壊を起こしていて、先生も泣くほどの状態。そこで私は女の子をいじめる男子児童を呼び出し指導しました。「彼女は将来美人になると見抜いた。大切に



小学校3年生、日光にて当時のクラスメイトと。前列左端がやくさん。

じゃがいもの種類はいくつ? 起源は? どうやって育てるの?...それをきっかけに世界は広がりますね。

また、「色」について詳しくなっても面白いですよ。あるテレビ出演の際、お世話になるスタイリストさんに彼女のスカートを指して「ケリーグリーンです」と言ったことがあります。彼女は「この色、ケリーグリーンというん

ろ」と。女の子にちよつかい出すのは好きの裏返し。自分の経験でわかっていますから。

個々にそうした指導を重ねたところ、それからクラスはまとまり始めたと言いました。卒業時には子どもたちの約束通り、クラス全員の似顔絵を描いてプレゼントしましたね。

私は月一で小学校の同窓会を開くくらい、当時の友達とは仲が良いんですよ。つくづく思うのが、小学校時代の友達は「一生モノ」。だから「今の友達は一生モノだから、大切にしろんだよ」と、彼らに声を大にして伝えたいですね。

冒頭自ら「優秀なお子でした」と、やく流トークを繰り出したやくさん。失礼を恐れないで言うところ、とても「おちゃめ」な方だった。

そして正義の人でもある。たとえ逆ギレ、されようと信号無視する大人に毅然と立ち向かうのは、それは背後に未来を担う子どもたちの目があるからにはかならない。いまは亡き恩師・鈴木先生から薫陶を受けた、ハカセ、少年。「先生は、子どもの引き出しをいっぱい開けて」と力説したやくさんの言葉を、じっくりとかみしめたい。